

The Journal of Tokyo Medical Association

TMA

医師と東京都医師会を結ぶ会報誌

5

2025 VOL.78
NO.4

映画『てっぺんの向こうにあなたがいる』場面写真より



©2025 「てっぺんの向こうにあなたがいる」製作委員会

映画『てっぺんの向こうにあなたがいる』完成記念 **特別対談** 前を向いて生きること

吉永小百合 × 尾崎治夫

前を向いて

尾崎治夫
東京都医師会 会長



映画『てっぺんの向こうにあなたがいる』完成記念 **特別対談**

生 き る こ と



俳優
吉永小百合

俳優の吉永小百合さんが自身初の登山家役に挑戦した

映画『てっぺんの向こうにあなたがいる』が2025年10月31日(金)に公開されます。

1975年に女性初のエベレスト登頂に成功した田部井淳子さんの実話をもとに、

晩年がん告知を受けながらも山に登り続けた勇壮な生涯を演じました。

その生き方に触れて、本作にどのような思いを込められたのでしょうか。

今後の超高齢社会を明るく生きていくために大事なこと、

医療ができることを尾崎治夫会長と語り合っていました。

対談日：2025年1月29日 グランドプリンスホテル高輪 貴賓館にて

何事にも前向きにチャレンジする姿に惹かれて。

尾崎 この度の映画で吉永さんが演じられた、田部井淳子さんとの出会いからお聞きたいと思います。吉永さんがパーソナリティを務められているラジオで、2012年に対談されたと伺いました。

吉永 田部井さんがスタジオに来てくださって、明るくてチャミングなお話をたくさん聞かせてくださいました。海外に行かれて見聞きたさまざまなことを、ご自身の生き方にも取り入れようとする進取の精神をお持ちで、本当に素敵な方でした。どんなことがあっても前へ進んでいくことの大事さを、前向きな気持ちで話してくださるのが楽しくて。すっかりファンになってしまったんですね。

そのとき田部井さんは耳にピアスをつけられていて、とてもお似合いました。お話を聞くと、ニューヨークシティマラソンに参加されたとき5番街でピアスの穴をあけられたそうです。実は、私も10年ほど前にピアスをしたと思ったのですが、勇気が出ませんでした。この度、田部井さんを演じるにあたって「よしっ」と心を決めて、皮膚科の先生にお願いして穴をあけました。今つけているピアスは田部井さんの形見としてご家族からいただいたもので、ずっと大事にしたいと思っています。

尾崎 それ以前はピアスはされていなかったんですね。

吉永 役を演じる仕事をしていますと、時代劇に出る機会もあります。その際に耳の穴が映ってしまう心配もありました。

でも、今回の役に取り組む自分の気構えを持ちたいと思ったのです。

尾崎 そうだったんですね。それではラジオでご共演されるまで、田部井さんとは全く面識がなかったのですか。

吉永 はい。ただ、私も山が大好きで20代の頃は登っていましたから、田部井さんがエベレストをはじめ世界の山々に登られていることは存じていました。ラジオでは、東日本大震災で被災した高校生たちを元気づけるための富士登山プロジェクトのことも話してくださいました。その資金を調達するために仲間とシャンソンを習われて、チャリティーコンサートを開かれたんです。それがまた楽しそうで、お客様も感動して寄付をいただけるという、気持ちのいい循環をつくられていたと思います。

尾崎 田部井さんが吉永さんのラジオに出演されたのは、がんの告知を受けた後だったそうですが、そのことを微塵も感じさせないような明るく前向きなエピソードですね。

吉永 私はそのときご病気だったことは全く知らず、後に本に書いていらしたのを拝読して驚きました。何事にもチャレンジする気持ちをお持ちで、「病気になったからって病人にならずにちゃいけなわけじゃない」とおっしゃって、新しいことに次々と取り組まれていました。もしも、私がこれから何かの病気になったとしても、田部井さんを見習って立ち向かっていこうと思えるのは、その姿が胸に深く残っているからです。





がんになっても、家族や社会とともにまた輝ける時代へ。

尾崎 がんに対する医療の考え方や、病気そのものへの向き合い方というのは、時代とともに変化してきました。まだ私が30代前半だった頃は、大学病院でがんの患者さんを診ると、ほとんどの場合は告知をしませんでした。患者さん本人に対しては別の病気だとお伝えをして、「治りますから一緒に治療を頑張りましょう」というお話をします。がんは告知しないというのが当時の原則だったんですね。そうはいっても、症状は進行して次第に具合は悪くなっていきますから、毎日病室に行ってお話をしていると、患者さんも医師もお互いに気持ちが辛くなっていく、そんな時代がありました。

今は、がんと診断されてもおおよそ6割は治りますし、早期に見つかれば9割は治る時代になりました。日本人の約2人に1人が何らかのがんにかかります。これは割合で言えばであって、高齢になってから罹患するケースが多いので、40代～60代の半分がかかるというわけではありません。

がんの治療については、手術療法、化学療法、放射線療法、免疫療法と、かつて告知をしなかった時代にはなかった療法が確立されています。そうした治る手段とともに、患者さんやご家族を支える仕組みというものも整ってきています。先ほどの言葉のとおり「治りますから一緒に治療を頑張りましょう」と伝えられる社会に変わっているんですね。そこに至るまでの過渡期に、田部井さんご本人とご家族はがんと闘われていたように思います。

吉永 ご主人の田部井政伸さんが温かくサポートなさっていたことが印象深いです。田部井さんは山に登るときはお一人か他の仲間と一緒だったそうですが、ご病気になられてからは国内外を問わずこの山に行くにしても、ほとんどご主人がついて行ってらっしゃるんですね。

田部井さんは、何もしなければ余命3か月という診断だったと伺っています。けれども、そこからご自分でさまざまな情報を見つかったり、抗がん剤治療も積極的に受けて次の日には山に登ったり、常に前を向いて病気と向き合って、告知から4年経ってもお元気でられました。その間にはバングラデシュの最高峰にも登頂されたそうです。

その土地の空気や食べ物など、さまざまな形で美しいもの素晴らしいものに触れ合っていくことが病気にいいのではないかなと思うんですね。日本を飛び出して世界を回るのは頻繁にはできませんし、歳を重ねると一層できなくなってきましたけれども、それでも周りの人が支えていけば、身体というのは回復して元気になっていくんだということを感じます。

尾崎 おっしゃるように、例えば人と楽しいことをしたり、寄席などに行ってたくさん笑ったりすると、がん細胞をやっつけるナチュラルキラー細胞などが活性化して免疫力が高まるというようなデータはたくさんあります。おそらく田部井さんにとって、自分がやりたいことをサポートしてくれる人がいて、なおかつそこに仲間がいて、好きな活動が続けられるということが、非常にプラスに働いたのではないのでしょうか。そうしたことによって、ドクターに言われた余命を越えて何年も元気に過ごされた方のお話はよく耳にします。ですから、たとえ病になったとしても、ご家族や周りの方と一緒に自分のやりたいことをやろうと、前向きになれるような社会であることが大事だと思うんです。

近年は、がんの治療と仕事の両立を支援する取り組みに社会的な関心が高まっています。例えば、1,000人以上の労働者がいる大きな企業では、労働者の健康管理等を行う専属の産業医を1人選任しなければなりません。

吉永 そのような仕組みがあるのですね。

尾崎 もちろん1,000人未満の企業にも、専属ではありませんが産業医がいます。大事なのは、病気になった人に対して周りの人がネガティブなイメージを持つのではなく、また一緒に働けるように病気と闘って治してほしい、一生懸命頑張っていると思えるような職場環境をつくること。その会社で働く人の健康を診ている産業医がそれをきちんと理解して、患者さんの立場に立って応援してあげることです。

また、がんを治療する医師も単に治すことだけではなく、患者さんの症状がよくなってきて、社会に出て仕事ができる状態になったときにきちんと産業医に橋渡しをしてあげることも重要です。かつては、がんという診断を受けた人のほとんどは

会社に退職届を出しました。しかし、今はそうではありません。がんと闘いながら、治療をしながら、雇用継続を支援する制度の整備が進むなど、安心して働ける社会へと変わってきています。ですから最も大事なものは、病気になったときに自分は今もうダメだと思わないことです。また元気になって自分のやりたい仕事をする、田部井さんでしたら山登りをする、吉永さんでしたら映画俳優を続けるというように、人それぞれの大事なことを我慢する必要はありませんし、周りに支える人たちも

いますから。これからの時代は、そういう人生を前向きに生きることが必要だと思います。

吉永 田部井さんの「病気になったからって……」という言葉に通じるものがありますね。

尾崎 田部井さんの時代に、がんと向き合って前を向く生き方を実践されたということは、私はすごいことだと思います。ようやく今、社会が追いついてきていますね。

一人ひとりの一歩ずつが、社会を豊かに変えていく。

尾崎 田部井さんから受けた影響は吉永さんにとってとても大きかったのではないのでしょうか。

吉永 私にとってはもちろん、こういう形の夫婦がいたことを通して、ご覧になった方にも勇気を与えられるような映画になったらいなと思っています。ご主人の政伸さんは実際にとても素敵な方で、映画では佐藤浩市さんが演じられたのですが、こんな方に支えられて生きていたらどんなにいいでしょうと感じました。そして、田部井さんと一緒に世界の山々を登ってきた新聞記者を演じられたのが天海祐希さん。いつもそばで温かく励ましてくれる、サポートしてくれる、こんな同性の友だちがいたらどんなにいいだろうと。

今回の映画に関してはさまざまな企画をいただいて、一人ひとりが一生懸命に生きている、あるいは逆境から立ち上がっていくような女性を演じるものが多かったんです。その中で、数年前に田部井さんにお会いして魅力を知っていた私は、いつか演じられたらと心の中で考えていました。そして田部井淳子さんのお名前が企画の中で出たときに、ぜひやらせていただきたいと。

尾崎 そのような経緯があったんですね。

吉永 そして阪本順治監督をはじめ多くの方が携わり、時間をかけながら完成間近までできました。田部井さんのご子息の田部井進也さんは、東北の高校生の富士登山プロジェクトのリーダーなのですが、山登りのシーンを撮影するときなどはサ

ポートに来ていただきました。医療監修でも医師の方にご指導いただきましたし、本当にみんなの力で出来上がった映画です。

尾崎 映画というものの中に医療というエレメントが入ると、我々が実際に行っている医療に対する理解度が深まっていきます。例えば、実際の生活で病気になって病院に行かないとわからない現実というのはたくさんあると思います。それが映画や小説の中で描かれることで、ある程度のリアリティをもって体験できるわけです。医療の問題としてだけではなく、そこから元気をもらって生きる力にもなっていると思います。それには演じられる方の力も大きいですよ。

吉永さんは今回、田部井さんを演じられました。女性は家庭を守り子どもを育てるのが当たり前の時代に、その偏見に向き合った役を演じる中で感じられたことはありますか。

吉永 私自身は小さい頃からラジオドラマなどに出演しまして、15歳で映画界に入って今まで仕事を続けてきましたから、「女性は家にいなさい」というような言葉をもらったことはなくて。夫も「女性が社会に出て仕事をしているのは当然」ということを常に言っている人でしたから、そういうネックは全くありませんでした。ただ、田部井さんにそうした偏見が向けられていたことは伺っていましたが、女性ができることを一歩ずつやっていくことがどんなに大変なことだったのかと感じられました。ですからこの映画を通して、一歩ずつでも前に進めば何



かができるという思いになってくださったらとても嬉しいです。これから社会で活躍する女性を支えていくには、どのようなことが大事になってくると尾崎先生はお考えでしょうか。

尾崎 今、医学部に入学する学生の半数が女性なんです。私が入学した頃は数人でした。それほど女性が増えているんですね。例えば血の濃さや量は、男性と比べて女性の方が低いあるいは少ないためどうしても体力的な差があります。それから、生理があり、妊娠・出産があり、更年期があるという、女性特有のライフステージがあります。そのため毎日同じコンディションで働けるわけではないということを、男性側がきちんと理解してサポートすることが大事です。

依然として男社会の考え方が残っている部分がありますが、変わらなければいけない時代になっています。女性の活躍はもちろん、これからは高齢者の人口も増加していきます。でも高齢者といってもまだまだ元気で仕事もできる方はたくさんいらっしゃいます。女性だから、何歳だから、という理由で

社会で活躍できないということは全くありません。女性も高齢者も生き生きと活躍する世の中になれば、これからもっと豊かで楽しい社会に変わっていくんじゃないかと私は思っています。

吉永 みんなが明るく元気に生きていける社会が待ち遠しいですね。田部井さんも、少しでも前に出よう、一歩行動してみようというお考えをお持ちでした。そのパワーは、この映画に携わったすべての方に伝わっていたように思います。例えば小道具を担当された方は、田部井さんがどんなものを好んでいたか、どんな料理を作っていたかということを一生涯懸命調べていました。福島県に出向いて足跡を調べた方もいらっしゃるし、同じ景色を見るために多少高山病になりながら山に登った方もいらっしゃいました。スタッフ一人ひとりがそれぞれの思いで田部井淳子という人物を研究して、田部井イズムを表現していたと思います。

健康は目的ではなく手段、苦しいときこそ笑うために。

尾崎 スタッフ一丸となって映画づくりに取り組まれた中で、田部井淳子その人を演じられた吉永さんが最も田部井イズムを実感されたと思います。その思いに触れて、どのようなことを考えられましたか。

吉永 役を演じるということは何とかやりきることができましたけれども、その思いを自分自身に当てはめて、これからも歳を重ねていきながらどのように生きていくかを考えたときに、簡単に答えが出るものではないなと思いました。ただ、自分にできることを1つずつやっていこうと。私はさまざまな物事に興味を持って生きるタイプの人間なのですが、心も身体も動かしながら一步一步前に進んでいきたいということは強く感じました。

尾崎 人生を生ききる、というのはとても難しいことだと思います。日本の人口は減少している一方で、東京は2040年まで人口が増加していきます。そうした状況を踏まえた医療のあり

方を考えていく必要があると思っています。

吉永 東京が今も人口が増えているというのは知りませんでした。

尾崎 人口流入が続く東京ならではの特殊な事情です。例えば地方には、広い土地に大家族で住んでいて、息子夫婦がいたり、孫がいたり、まだまだ多様な家族形態があります。しかし東京の特に都心部では、夫婦のみ、夫婦のどちらかが亡くなって単身、あるいは高齢の親と子の同居など、家族がお互いに支え合うことが難しくなるケースがどんどん増えていきます。そうした方々を地域にいるみんなですべて支えていく地域包括ケアシステムという仕組みをつくりたいというのがポイントの1つです。

もう1つは、人生を明るく前向きに生きていくにはやはり、運動することや食べることが大事です。それを1人で行うよりも、仲間みんなが集まって楽しくお話をしながら身体を動かし



た方が、筋力トレーニングの効果や精神面の充実度などは高まるんです。

昨今は健康志向が高まっていますが、例えば血圧の数値が良くないだとか、自分が健康であるかないかばかりをチェックしている人が多い。しかし健康というものは、自分が好きなことを楽しむため、前向きに生きるために必要なものであって、あくまでも手段です。ところが、健康が目的になってしまっている人が多すぎます。取り違えてはいけません。

吉永さんは仕事に向き合って打ち込まれて、なおかつ身体もきちんと動かす生活を送られていて、非常に理想的だと思います。今回の映画の撮影では何が一番大変でしたか。

吉永 撮影で東京から埼玉、群馬、栃木、それから富士山にも行きましたから静岡、山梨、長野と毎日のように長距離を移動しまして、朝が早いことも多くて大変でした。標高2,800mほどの山でも撮影をしました。やっぱり高いところに行くと呼吸は

どうしても乱れてくるものなんじゃないかな。

尾崎 およそ3,000mを超えると空気が薄くなりますから、呼吸は辛くなりますね。

吉永 田部井さんがおっしゃった「山はいい日ばかりじゃないから、苦しいときこそ笑うんだよ」というのも大変な言葉ですよ。苦しくてなかなか笑えないことってどうしてもありますけれど、そういうときは身体を動かすことが私にとってはとても大事なことです。泳ぐことが一番好きで、水と友だちになって元気になっていく、だから苦しいときこそ泳ぐことを大切にしています。何もスポーツじゃなくてもいいと思います。例えば字を書くことでも、絵を描くことでも、自分にとっての大事なものを見つけて生きていく、それが笑うことにつながるような気がするんです。これからの高齢化社会に大事なのは、やっぱり自分の前にある目標を見つけて、一步一步進んでいくこと以外にないように思いますね。

明るい未来に向けて、映画と医療ができること。

尾崎 吉永さんのご活躍に私たちはいつも勇気づけられています。そして映画には人の気持ちを動かす力があります。私たちが支えていく医療もまた、人を元気に健康にする力があります。これからの医療は、医師から患者さんへのアプローチをもっと変えていく必要があると考えています。

例えば、診察室で医師と対面しても、患者さんの方には目もくれず、パソコンに表示されている電子カルテだけ見て診断するドクターというのは少なからずいます。もちろんデータは重要です。ただ私なんかは患者さんと顔をつきあわせて、病気の話というよりも日頃の生活での悩みを聞いたり相談に乗ったりします。そうした信頼関係があって話をすると患者さんは力が湧いて明るい笑顔になる、そういうことも大事だと私は思っています。

吉永 診察に伺っても、先生のお顔を一度も見ないで悲しくなることはありますね。とても大事なことをおっしゃっていただきました。尾崎先生のところに伺ったらきっと元気になりますね。もし私が病気になったら、よろしくお願いします(笑)。

尾崎 おまかせください(笑)。

吉永 田部井さんは、がんの治療で先生と向かい合ったときに「治療のための治療はしたくありません」とおっしゃって、演じた私はとても衝撃を受けました。同じような状況になったとき、私はこんな風に言えるだろうか。それほどに田部井さんの生き方は見事で、山に対しても、病気に対しても、それを

乗り越えると言える強さを同じように持つことは私たちには難しいかもしれません。でも、この映画をご覧になったら、前を向いて生きるってこういうことなんだと感じていただけるのではないかなと思うんです。

これから少子高齢化が進んでいく時代に、歳を重ねられた方も、自分の大事なことを見つけて一步一步前に、という思いを胸に刻んで人生を楽しんでいただきたいし、私自身もそうしたいと思っています。そうした未来には、ドクターの先生方の支えが欠かせないとも思いますし、これからも頼りにしながらみんなで助け合って前を向いて生きていきたいですね。

尾崎 これからの時代を元気に暮らすためには、私たち医師が医療をもっと地域に広げていく必要があります。診療所や病院でただ患者さんが来るのを待っていて、具合が悪くなった人を診るだけではいけません。具合が悪くなる前に予防のアドバイスをするなど、もっと前に出ていって、病気にならない人を増やしていくようにしないと、日本の社会には活気が出ないと思っています。医療をそのように変えていかなければならないと考えています。

吉永 大変なことですけど、とても大切なお話を伺うことができました。ありがとうございます。

尾崎 そのために東京都医師会として今後も医療のあり方を提言していきたいと思います。こちらこそ、本日は貴重なお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。



1975年、エベレスト山頂に向かう一人の女性の姿。一步一步着実に山頂(てっぺん)に向かっていくその者の名前は多部純子。日本時間16時30分、純子は女性として初の世界最高峰制覇を果たした——しかしその世界中を驚かせた輝かしい偉業は純子に、その友人や家族たちに光を与えると共に深い影も落とした。晩年においては、余命宣告を受けながらも「苦しい時こそ笑う」と家族や友人、周囲をその朗らかな笑顔で巻き込みながら、人生をかけて山へ挑み続けた。登山家として、母として、妻として、一人の人間として…。

純子が、最後に「てっぺん」の向こうに見たものとは——。

映画『てっぺんの向こうにあなたがいる』

2025年10月31日(金) TOHOシネマズ 日比谷ほか 全国公開

監督: 阪本順治

出演: 吉永小百合 のん/ 天海祐希/ 佐藤浩市 ほか

配給: キノフィルムズ

©2025「てっぺんの向こうにあなたがいる」製作委員会



撮影 三浦憲治
ヘアメイク 森下千帆